「宝の民」　　２０２６年3月１５日　主日礼拝
使徒言行録　第７章３０～４３節

先週から私たちは、初代教会で最初に執事として選ばれたステファノが最高法院に引き出され、そこでステファノが旧約聖書から行った説教から学んでいます。天と地を造られた神様はアブラハムを選び、彼を祝福の基としてくださいました。そして、アブラハムの息子イサクをアブラハムの約束の継承者としてくださり、イサクの息子ヤコブにイスラエルという名前を与えて、イスラエル１２部族の基としてくださいました。ところが、ヤコブの１１番目の息子であったヨセフは兄たちからねたまれて、エジプトに奴隷として売られてしまいます。けれども、このような不幸な出来事もすべて、後にヨセフ自身が創世記４５章５節で語っているように、イスラエル民族の命を救うために神様が兄弟たちよりも先にヨセフをエジプトに遣わすという、神様の壮大な御計画の一部だったのです。そしてそれから４００年の月日が経ち、やがてヨセフのことを知らないエジプト王が立てられた時代に､エジプトの奴隷として虐げられていたイスラエルの民を奴隷から解放するために、神様はモーセを立ててくださいます。神様はモーセを選んで遣わされる際に、出エジプト記３章７節以下で、このように語ってくださいました。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ」。このように、私たちの神様は私たちの苦しみをつぶさに見てくださり、叫び声を聞いてくださり、私たちの元へと降ってきてくださるお方なのです。

こうしてイスラエルの民の奴隷解放のために神様から選ばれたモーセですが、モーセは神様からの召命を受けた際に、自分が選ばれたことに対して疑問を呈します。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか」。モーセは、自分を受け入れてくれなかったイスラエルの民のために、どうして自分が働かなければならないのかと神様に反発しているのですが、それは同時に、イスラエルの人々に受け入れられなかった自分はいったい何者なのでしょうか、という自分探しの問いでもありました。そのようなモーセの問いに対して、神様はこう応えます。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える」。神様はここで、モーセに向かってこう言われているのです。たとえ、あなたがイスラエルの人々に受け入れられなくても、私は必ずあなたと共にいる。それこそが、私があなたを遣わすしるしである。あなたがたイスラエルの民はエジプトの奴隷としてエジプト人に仕えてきたが、奴隷から解放されたとき、あなたがたは神である私に仕える。あなたがたは神の民、あなたは神の民の一員なのだ。こうして、イスラエル人としてもエジプト人としても受け入れられなかったモーセは、神の民として神様に受け入れられたのです。

今日の聖書の箇所、使徒言行録７章３０節から３６節までには、モーセの召命の話が簡単に記されています。そして３７節には、ステファノの説教の中でもっとも重要なことが記されています。モーセはイスラエルの人々にこう告げました。「神は、あなたがたの兄弟

の中から、わたしのような預言者をあなたがたのために立てられる」。これは、申命記１８章１５節に出てくる言葉ですが、ステファノは、イエス・キリストこそがモーセのような預言者として旧約聖書で語られている人そのものであると暗に語っているのです。そしてさらにモーセの話が続きます。モーセは神様からいただいた命の言葉をイスラエルの人々に語り伝えたにもかかわらず、イスラエルの先祖たちはモーセに従いませんでした。モーセが山に登って神様からの教えをいただいている際に、なかなか帰ってこないモーセに代わって、モーセの兄であるアロンに、金の子牛の像で自分たちの神々を作ってほしいと願い出ます。出エジプト記３２章に記されている通りです。使徒言行録７章４１節には、次のように記されています。「彼らが若い雄牛の像を造ったのはそのころで、この偶像にいけにえを献げ、自分たちの手で造ったものをまつって楽しんでいました」。　目で見ることのできない神様への信仰が揺らぐとき、人は目に見える偶像を作り、それに頼ろうとします。けれども、目に見える偶像は自分の心の中にある信仰心を満足させるためのものであって、目に見えない神様に対する信仰心の表れではないことをよく覚えておきたいと思います。実際、この４１節でも、人々は「自分たちの手で造ったものをまつって楽しんで」いたのです。自分で作った神様に、自分の満足のためにお供え物をする。このように、自分の心を楽しませるために作る偶像は、私たちをまことの神様から引き離すのです。

偶像の話が出ましたので、偶像の神々がいかにむなしいものなのかということを記した聖書の箇所を２つほどご紹介したいと思います。エレミヤ書１０章１節以下には、こんなふうに記されています。旧約聖書の１１９５ページになります。【イスラエルの家よ、主があなたたちに語られた言葉を聞け。主はこう言われる。異国の民の道に倣うな。天に現れるしるしを恐れるな。それらを恐れるのは異国の民のすることだ。もろもろの民が恐れるものは空しいもの。森から切り出された木片、木工がのみを振るって造ったもの。金銀で飾られ、留め金で固定され、身動きもしない。きゅうり畑のかかしのようで、口も利けず、歩けないので、運ばれて行く。そのようなものを恐れるな。彼らは災いをくだすことも、幸いをもたらすこともできない。】 私はこの箇所を読むといつも思い出すことがあります。もう何十年も昔の話になりますが、宮崎で頭が二つある白い蛇、双頭の白蛇が見つかったことがあります。単なる突然変異だと思うのですが、その双頭の白蛇が珍しいので神の化身であると騒がれたことがあります。そしてその蛇は捕獲され、籠に入れられて飛行機に乗せられて東京に運ばれて行きました。私はその記事を読んだとき、籠に入れられて飛行機で運ばれなければ東京に行くこともできない神様っていったいどんな神なんだろう、と思ってしまいました。人間によって神に仕立て上げられ東京まで運ばれた蛇も、さぞかし迷惑なことだったろうと思います。

もう一ヵ所、イザヤ書４４章９節以下には、こんな言葉が記されています。旧約聖書の１１３３ページになります。【偶像を形づくる者は皆、無力で、彼らが慕うものも役に立たない。彼ら自身が証人だ。見ることも、知ることもなく、恥を受ける。無力な神を造り、役に立たない偶像を鋳る者はすべて、その仲間と共に恥を受ける。職人も皆、人間に過ぎず、皆集まって立ち、恐れ、恥を受ける。鉄工は金槌と炭火を使って仕事をする。槌でたたいて形を造り、強い腕を振るって働くが、飢えれば力も減り、水を飲まなければ疲れる。木工は寸法を計り、石筆で図を描き、のみで削り、コンパスで図を描き、人の形に似せ、人間の美しさに似せて作り、神殿に置く。彼は林の中で力を尽くし、樅を切り、柏や樫の木を選び、また、樅の木を植え、雨が育てるのを待つ。木は薪になるもの。人はその一部

を取って体を温め、一部を燃やしてパンを焼き、その木で神を造ってそれにひれ伏し、木像に仕立ててそれを拝むのか。また、木材の半分を燃やして火にし、肉を食べようとしてその半分を上であぶり、食べ飽きて身が温まると「ああ、温かい、炎が見える」などと言う。残りの木で神を、自分のために偶像を造り、ひれ伏して拝み、祈って言う。「お救いください、あなたはわたしの神」と。】　ここには、偶像を作ってそれを拝む者の愚かしさがおもしろおかしく記されています。私たちバプテスト教会では、このように目に見える物に頼ることは、目に見えない神様への信仰の妨げになると考え、教会の中に神の像などの偶像を置かないようにしています。私たちも、目に見えないまことの神様に信頼していく信仰を立て上げていきたいと思います。

さて、使徒言行録に戻りますと、４２節の前半にはこう記されています。「そこで神は顔を背け、彼らが天の星を拝むままにしておかれました」。神様は、神から離れてしまい偶像の神々に仕える者たちをそのまま放っておかれます。神から離れて放っておかれた人々は、自ら滅んでいくのです。これが、この世における神様の裁きの出来事です。これに関しては、ローマの信徒への手紙１章１８節以下に詳しく記されています。この箇所はたいへん難しいので、またいつか機会があれば詳しく読みたいと思いますが、今日は該当する箇所だけ読んでみたいと思います。ローマの信徒への手紙１章１８節から２５節。新約聖書の２７４ページになります。【不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。そこで神は、彼らが心の欲望によって不潔なことをするにまかせられ、そのため、彼らは互いにその体を辱めました。神の真理を偽りに替え、造り主の代わりに造られた物を拝んでこれに仕えたのです。造り主こそ、永遠にほめたたえられるべき方です、アーメン。】

今日の聖書の箇所に戻りますと、こうして神様は、まことの神から離れてしまったイスラエルの人々から顔を背け、彼らがむなしい偶像の神々を拝むままにされました。旧約聖書にはそのことがたくさん記されています。聖書はさまざまな切り口で読むことができますが、旧約聖書は、神様から選ばれたイスラエルの民が何度も何度も神様から離れ偶像の神々に行ってしまい、けれどもそのたびに私に立ち帰れとあきらめずに何度も呼びかけてくださる神様の物語としても読むことができます。そのようなイスラエルの人々の有様に対して、神様は預言者を通して、使徒言行録７章４２節から４３節でこう語られます。『イスラエルの家よ、お前たちは荒れ野にいた四十年の間、わたしにいけにえと供え物を献げたことがあったか。お前たちは拝むために造った偶像、モレクの御輿やお前たちの神ライファンの星を担ぎ回ったのだ。だから、わたしはお前たちを、バビロンの彼方へ移住させる』。これは、旧約聖書のアモス書５章２５～２７節に記されている預言です。ここでは、まことの神様から離れてしまい、偶像礼拝に陥ったイスラエルの人々への裁きとして、バビロン捕囚が語られています。けれども今日私たちは、バビロン捕囚がイスラエルへの裁きではなく、神様に立ち帰るための手段であったことを、最後に見ておきたいと思います。

イスラエル民族はエジプトの奴隷から解放され、約束の地カナンに入っていきます。そして十二部族にそれぞれの領地が与えられます。この部族ごとの領地を一つのイスラエル王国に統一したのがダビデ王でした。統一されたイスラエル王国は、ダビデの後を継いだソロモン王の時代に隆盛を極めます。ソロモン王は外交に長け、近隣の大国の王の娘や高官の娘を自分の妻として迎え入れます。こうして、近隣の強大国とよい関係を結んだソロモン王の時代は、イスラエル国家がもっとも繁栄した時代でした。けれども、ソロモン王が妻として迎え入れた諸外国の王や高官の娘たちは、それぞれの国々の神々をイスラエルに持ち込みます。こうしてイスラエル王国は、国の軍事的・経済的繁栄とは裏腹に、宗教的にはたいへん乱れていきます。その結果、ソロモン王の次の時代には、北イスラエルと南ユダの２つの王国に分裂してしまいます。やがて、北イスラエル王国はアッシリア帝国に滅ぼされ、南ユダ王国もバビロニア帝国に負けて、南ユダ王国の首都エルサレムにいた主だった人々は、バビロンに捕虜として連れていかれます。バビロン捕囚です。この北イスラエル王国と南ユダ王国の滅亡は、イスラエルの人々が神様から離れてしまったことへの裁きであると理解されました。そして、バビロンに連れていかれたイスラエルの捕囚の人々は、自分たちは神から見捨てられた民であると理解しました。神がおられるエルサレム神殿から遠く離れたバビロンに住んでいた捕囚の民は、自分たちのうちに希望を持つことができませんでした。捕囚の民にとっては、捕囚から免れてエルサレムに残った住民たちが捕囚に連れていかれた自分たちのために神様に祈ってくれることが唯一の希望だったのです。けれども神様は、エルサレムに残った民ではなく、バビロンに捕囚として連れていかれたあなたがたこそ、イスラエルを再建する人々なのだと語られます。エゼキエル書１１章１４節以下には、次のように記されています。旧約聖書の１３０９ページになります。【主の言葉がわたしに臨んだ。「人の子よ、エルサレムの住民は、あなたの兄弟たち、すなわちあなたの親族である兄弟たち、およびイスラエルの家のすべての者に対して言っている。『主から遠く離れておれ。この土地は我々の所有地として与えられている』。それゆえ、あなたは言わねばならない。主なる神はこう言われる。『確かに、わたしは彼らを遠くの国々に追いやり、諸国に散らした。しかしわたしは、彼らが行った国々において、彼らのためにささやかな聖所となった』。それゆえ、あなたは言わねばならない。主なる神はこう言われる。『わたしはお前たちを諸国の民の間から集め、散らされていた諸国から呼び集め、イスラエルの土地を与える。彼らは帰って来て、あらゆる憎むべきものと、あらゆる忌まわしいものをその地から取り除く。わたしは彼らに一つの心を与え、彼らの中に新しい霊を授ける。わたしは彼らの肉から石の心を除き、肉の心を与える。彼らがわたしの掟に従って歩み、わたしの法を守り行うためである。こうして、彼らはわたしの民となり、わたしは彼らの神となる。しかし、憎むべきもの、忌まわしいものに心を寄せている者には、彼らの行ってきたことが頭上に降りかかるようにする』」と主なる神は言われる。】　このように、主なる神様は、バビロンに捕囚として連れて行かれた民、神様から見捨てられたと思われていた人々を、神の民としてくださるとおっしゃられるのです。同じように、この説教を語っているステファノや初代教会の人々も、ユダヤ教やローマ帝国から弾圧を受けてたいへんな思いをしているけれども、あなたたちこそがまことの神の民なのだ、と神様はおっしゃられるのです。この「神の民」に関しては、申命記７章６節以下に次のように記されています。旧約聖書の２９２ページになります。　【あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、

御自身の宝の民とされた。主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。ただ、あなたに対する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隷の家から救い出されたのである。】

神様は、イスラエルの民を愛されたので、イスラエルの人々をエジプトの奴隷から救い出してくださいました。同じように、神様は、私たち一人一人を愛してくださったがゆえに、私たちを罪の奴隷から救い出してくださったのです。それは、私たちが他の人たちよりも優れていたからではなく、むしろ他の人たちよりも貧弱だった私たちを神様が選んでくださり、その私たちを罪の奴隷から救い出すためにイエス・キリストをこの世にお送りくださり、イエス・キリストの十字架を私たちの罪の贖いとしてくださったのです。私たちは神様によって選ばれた神の民、宝の民なのです。私たちもそのことをしっかりと心に留め、神様の宝の民としてふさわしく歩むことができるように、神様から少しずつ変えられていきたいと願います。

お祈りしましょう。